

ここが信用できない日本の男性学

——平山亮『介護する息子たち』の問題提起を受けて

澁谷 知美

本稿の目的は、日本の男性学の信用できない点を示し、信用に足る男性学を構想することである。最初に、日本の男性学の信用できない点として、①男性の「生きづらさ」を女性のそれと並列して語ること、②男性による女性支配のリスク（＝女性支配に支払われるコスト）を「生きづらさ」と呼ぶこと、の2点を挙げた。男性学者の多賀太は「社会的達成への脅迫」に男性がさらされることを「男の生きづらさ」と位置づけ、女性のそれと並列する。しかし、平山亮によれば、個人としての生存そのものを困難にさせられる「女の生きづらさ」とそれとを並列して語るべきではない。また、男性が自己脅迫的に稼得役割に固執することでさらされる様々なリスクは、家庭における男性支配を維持するための対価（コスト）である。つまり、「男の生きづらさ」とは、「支配の挫折」、「支配のコスト」、「自縄自縛」でしかない。次に、これらの性格を無視して単純になされる「男の生きづらさ」の主張は、差別と権力を批判的に分析する学術的言説のなかで相当に特殊であることを指摘した。最後に信用に足る男性学として、次の課題を遂行するものを挙げた。すなわち、①身近な女性の自立を応援することの男性への推進、②女性／相対的に弱い立場にある同性への加害を誘発する男性性についての分析、③稼得役割に固執する／の獲得に失敗した男性を「冷却する」言説の開発である。

キーワード：男性学，男性性研究，「男の生きづらさ」

1. 本稿の目的

本稿の目的は、日本の男性学の信用できない点を示し、信用に足る男性学を構想することである。信用できない点を含む日本の男性学の例として多賀太(2006, 2016)、伊藤公雄(1996, 2009)、田中俊之(2009, 2015)の著作を挙げ、信用できない点の適示にさいしては平山亮の『介護する息子たち』(2017)を援用する。

なお本稿は2018年9月2日に開催された国際ジェンダー学会2018年大会シンポジウム2「男性学／男性性研究のゆくえ」で配布したレジュメに加筆修正をしたものである。文中で「シンポジウム」と言う場合、如上のシンポジウムを意味

する。また、「男性学 Men's Studies」と言うとき、そこに平山 (2017) は入らない。平山の研究は男性性研究 Masculinity Studies, もしくは海妻徑子(2019)の言う「男性 [性] 批判研究 Critical Studies on Men and Masculinities」に分類されるといのが筆者の認識である。思わぬ誤解があるといけないので、念のため付記しておく。

2. 日本の男性学のどこが信用できないか

日本の男性学の信用できない点とは、男性の特権にまつわるコストを「生きづらさ」と呼び、男性の「被害者性」を強調しながら、特権を放棄するための考察を怠っている点にある。

ここ何年かで「男の生きづらさ」という言葉を耳にすることが多くなった。この言葉が世間でいかに「ウケがいい」ものであるかは、目に付く出版物をいくつか列挙するだけでも推しはかることができる。『AERA』2014年9月1日号の特集は「男がつらい!」であった。社会学者の田中が2015年に出版した本のタイトルは『男がつらいよ』。教育社会学者の多賀太が2016年に刊行した『男子問題の時代?』の帯には「男の生きづらさ」と大書きされている。

『毎日新聞』2016年12月7日付け夕刊では「男が生きづらい／出世競争も家事も育児も…／「男らしさ」幻想と現実との落差／自殺者数は女性の2倍以上」と銘打った特集記事が掲載された。同記事には、「パパ」と書かれたエプロンをスーツの上に着用し、右手にビジネスバッグ、左手にフライパンを持つ男性のイラストがある。この男性は、我が子と思しき少女をおんぶしながら「仕事で忙しいけど、弱音は吐けない」、「イクメン」と呼ばれたいけど……」というセリフを言いつつ涙を流している。おんぶする少女の顔が男性の顔の左側から見えている。男性の背後には、男性から見た右側にビル群が、左側に片手を腰にやり、片手を突き上げて「パパがんばって」と氣勢を上げる、おそらく妻と思われる笑顔の女性が配置されている。彼女の足元に転がっているのはお玉とフライ返しであり、これらの調理器具によって家事労働の責任が(全部か一部かは別として)女性から男性に移転されたことが表現されている。男性の右側に「仕事」を象徴するアイテムを、左側に「家事・育児」を象徴するアイテムを配置したこのイラストが、男性が「仕事」と「家事・育児」の両立に引き裂かれて「生きづらさ」を感じている様を図示していることはいうまでもない。

「男の生きづらさ」という言葉は教室においても「ウケがいい」。一般的に自殺率は女性より男性のほうが高いこと、過労死する労働者の数は女性より男性のほうが多いことなどの「男の生きづらさ」と解釈されうることがらについて大学の

ジェンダー論の授業で語ると、男子学生のみならず女子学生が共感的な態度になる。「これまで女性差別しかないと思っていたけれど、男性差別もあることが分かりました」、「女性差別のことしか言わないフェミニストはアンフェアでは」というコメントを女子学生から受け取ったことは一度や二度ではない。

一方、女性は貧困に陥りやすい、女性の平均賃金は男性のそれよりも低い、性暴力の被害者数は圧倒的に女性のほうが多いといった「女の生きづらさ」と解釈されうるものがらについて説明しても、男子学生の共感ほとんど得られない。多くは黙っているか、「男だって生きづらい」というコメントを返してくる¹⁾。

かように、「男の生きづらさ」といっていけば、みんな満足! という場が社会のあちこちで展開しているのがここ何年かの状況である。皆が愛してやまない「男の生きづらさ」にわざわざ疑問を差しはさむのは馬鹿者のすることであり、天皇制タブーとまでは言わないが、それを何分の一かに希釈した「男の生きづらさタブー」のようなものがあると実感している。

そうした実感を持つ筆者も「男の生きづらさ」が存在しないと主張するものではない。その「男の生きづらさ」なるものが「支配の挫折」、「支配のコスト」、「自縄自縛」でしかないのに、それにかんするエクスキューズ以上の指摘がないまま、ただただ「男の生きづらさ」が強調される「語り方」に問題があると考えている。

多少心強いのは、この問題意識を共有する人が皆無ではないということだ。筆者が自身のツイッターに「ここが信用できない日本の男性学」という報告をします。「男の生きづらさ」を主張される先生方と討論する予定です」とシンポジウム開催前に書きこんだところ、2018年8月29日10時30分現在で「いいね」が696件付いた(図1)。

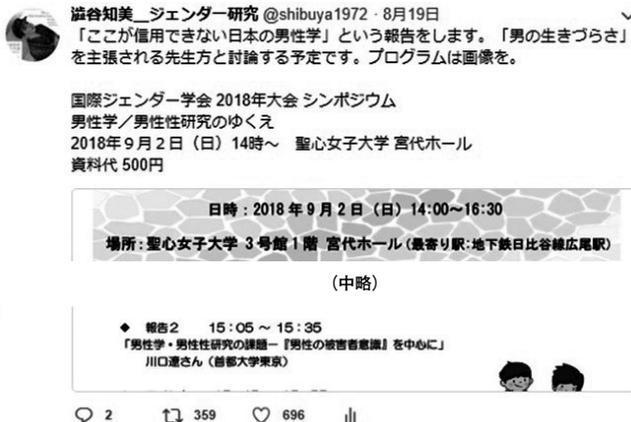


図1 2018年8月19日の筆者のツイート

当該ツイートにはシンポジウムのプログラムも同時に掲載されているので、たんにシンポジウム全体に関心があって「いいね」ボタンを押した人もいるかもしれませんが、全員が「ここが信用できない日本の男性学」というタイトルに共感したわけではないかもしれない。しかし、「男の生きづらさ」を主張する現行の男性学に疑念を持っている人が一定数いるとみなしたとしても大過はないと考えている。

3. 信用できない男性学の具体的事例の指摘

3-1. 平山亮 (2017) による指摘

前節において、「日本の男性学の「信用できない点」とは、男性の特権にまつわるコストを「生きづらさ」と呼び、男性の「被害者性」を強調しながら、特権を放棄するための考察を怠っている点」と記した。このような現状認識が妥当なものであることを、平山による2017年の著作『介護する息子たち』を援用しながら具体的に示す。

同書で平山は、女性の支配（女性の「生の基盤 the fundamentals for life」を掌握すること）の挫折をも「男の生きづらさ」と呼ぶ多賀（2016）の研究を批判している。その批判のポイントは、男性の「生きづらさ」を女性のそれと並列して語ること（批判ポイント①）、男性による女性支配のリスク（＝女性支配に支払われるコスト）を「生きづらさ」と呼ぶこと（批判ポイント②）、としてまとめることができる。

まず、平山によって批判されている多賀（2016）の記述を見てみる。

「われわれの社会が、男性支配の構造をなしている限り、男性たちが「男として」経験する生きづらさと女性たちが「女として」経験する生きづらさは、その本質において非対称であるということである。女性の生きづらさの本質は、男性優位の社会構造のもとで、能力発揮、成功、上昇の機会が奪われたり制限されたりすること、すなわち社会的達成の阻害にある。他方で、男性の生きづらさの本質は、男性優位の社会構造を維持するために、能力発揮、成功、上昇へと駆り立てられること、すなわち社会的達成への脅迫にある」（多賀 2016:58）

これにたいし平山は、男性の生きづらさと女性のそれとを並列する多賀の問題性を指摘している。上の「批判ポイント①」に該当する批判である。

「女性と男性によるこれらの経験は、たとえ「非対称的」という留保をつけた

としても、同じ「生きづらさ」として並列して語るべきではない、とわたしは考える。(中略) 妻自身の就労機会や稼得能力は「能力発揮、成功、上昇」「社会的達成」のためなどではなく、何よりも「生の基盤 (the fundamentals of life)」として必要なのである。そして、就労機会や稼得能力が構造的に制限されることは、個人としての生存そのものを困難にさせられることなのだから、これはたしかに〈生きづらさ〉と呼べるものである。だが、男性が自己脅迫的に追い求める夫としての稼得役割＝「家族を養うことができること」の方は別である。(中略) その志向は、本人の意図にかかわらず、結果的には妻の生殺与奪権を握り、支配する志向となることを免れえない。したがって、妻を扶養することを目的とした稼得能力の追求は、妻が自身の個人としての生存・生活のために稼得能力を追求することとは「似て非なるもの」である」(平山 2017:238。強調引用者)

多賀は「男性優位の社会構造のもとで、能力発揮、成功、上昇の機会が奪われたり制限されたりすること、すなわち社会的達成の阻害」を「女性の生きづらさの本質」と呼んだが、現実の「女の生きづらさ」はそれ以上のものであるというのが平山の指摘である。女性の就労機会が構造的に制限され、低賃金／単純労働が女性に割り当てられがちな社会で女性が働く理由の多くは、単純に「食っていくため」であって、出世欲その他を満たすためではない。とすれば、女が生存を阻まれることは文字どおりの「〈生きづらさ〉」であり、如上の事態を「女の生きづらさ」と呼ぶことは言葉の使い方として正しい。

一方、「男の生きづらさ」はそうではない。「男性優位の社会構造を維持するために、能力発揮、成功、上昇へと駆り立てられること、すなわち社会的達成への脅迫」が「男性の生きづらさの本質」であると多賀は言う。しかしながら、平山によれば、その「社会的達成の志向」とは「女性支配の志向」を意味する。社会的達成へと脅迫的に駆り立てられることは、女性支配へと脅迫的に駆り立てられることと同義であり、社会的達成ができなかったからといってジェンダー平等の観点からは何の問題もないはずだ。しかし多賀は、問題なしとしないどころかこれを「男の生きづらさ」と呼んでしまっている。平山が批判しているのは、こうした多賀の抜きがたい「保守性」(平山 2017:237) である。

ここで疑問を持つ読者がいるかもしれない。なぜ「社会的達成への志向」は「女性支配の志向」となるのか。平山が説明している。まず平山は、「男性が家族の扶養者であり続ける」ことが持つ意味を考察する。それは、「彼らに扶養され続ける家族が、その生存のために男性に従属し続けること」である。

そのような条件下で、男性が稼得者としての役割に固執することはどのような

意味を持つだろうか。それは「何よりもまず妻を自身に従属させ、その生活に係る資源の供給源を握ることで、妻を支配すること」への固執を必然的に意味する。稼ぎ手であろうとする夫の意図が「妻に良い生活をさせたい」であろうと、財布のひもを握っているのが妻であろうと、関係ない。妻の生存・生活が夫にかかっている限り、「その結果的な意味に違いはない」（平山 2017:234。強調原文）²⁾。本人の意図とは関係なく、稼得役割への男性の志向は「結果的には妻の生殺与奪権を握り、支配する志向となることを免れえない」（平山 2017:238）。

ところで、多賀が挙げている「能力発揮、成功、上昇」といった「社会的達成」の志向には、男性の場合、稼得役割＝「家族を養うことができること」の達成ないし維持も含意されているとみて大過ない。「男性は家族を持って一人前（社会的達成がなされる）」と考える男性は日本でまだ多く、多賀と平山双方が引用する目黒依子らによる調査では、「男性の自立にとって重要なこと」として「家族を養うことができる」に賛成している男性は71.2%を占める（目黒・矢澤・岡本 2012）。

以上をふまえれば、「なぜ「社会的達成への志向」は「女性支配の志向」となるのか」という問いへの答えはこうだ。夫である男性が社会的達成（＝家族を養うこと）を目指すことは、妻である女性の生殺与奪権を握ることを目指すのと、「男性支配の構造をなしている」社会（多賀 2016:58）では同義とならざるをえないから、である。

敷衍すれば、「社会的達成（＝家族を養うこと）ができなくて苦勞している」と訴える男性の「生きづらさ」に同情することは、「女性支配ができなくて苦勞している」と訴える男性の「生きづらさ」に同情することと変わりはない。多賀が「社会的達成への脅迫」にさらされることを「男性の生きづらさの本質」とまで呼び、現実離れた「女性の生きづらさの本質」を仮構して両者を並列に語ることは端的に言って不公正である。

平山による多賀の批判ポイント②は「男性による女性支配に伴うリスク（＝女性支配に支払われるコスト）を「生きづらさ」と呼ぶこと」であった。これに該当する批判は以下である。

「端的に言えば、稼得役割に対する固執と、それを追求するがゆえに男性がさらされる身体的・精神的・社会的リスクは、家庭における支配を維持するための対価である。多賀もまた、これらのリスクを「支配のコスト」と呼んではいるが、多賀のようにこのコストを男性の「生きづらさ」として語る必要は、わたしには感じられない。繰り返しになるが、男性による「一人で家族を養うことができること」の追求は、男性個人の「生の基盤」のために行われるわけで

はないからである。要するに、「支配のコスト」は「支配のコスト」でしかなく、それを「生きづらさ」と呼ぶ必要はない」（平山 2017:238。強調引用者）

稼得役割に固執するゆえに男性はさまざまなリスクにさらされる。妻を養うことを目的に勤め先の無茶な要求に応えるサラリーマンは、病気その他のさまざまなリスクにさらされるだろう。だが、すでに見たように、妻を養うことが女性支配を意味するかぎり、病気その他のリスクは「支配のコスト」以上でも以下でもない。まして「生きづらさ」などではない³⁾。

これにたいして出てくる反批判は、「では、病気その他のリスクを抱えることは、そのサラリーマンの自己責任だと言うのか」である。じじつ、シンポジウムでも似たような質問がフロアから提出されたし、壇上のパネリストから同旨の疑問を投げかけられた一場面があった。筆者の答えはシンプルである。「労働問題の観点からすれば被害者である。ジェンダー問題の観点からすれば「支配のコスト」を支払った人である」。この見解は矛盾するものではない。

平山による如上の2つの批判、すなわち、男性の「生きづらさ」を女性のそれと並列して語ること（批判ポイント①）、男性による女性支配のリスク（＝女性支配に支払われるコスト）を「生きづらさ」と呼ぶこと（批判ポイント②）から分かるのは、男性学言う「男の生きづらさ」なるものは、「支配の挫折」、**「支配のコスト」**でしかなく、さらに付け加えれば、「自縄自縛」でしかない、ということである。

「支配の挫折」、**「支配のコスト」**についてはすでに説明した。「自縄自縛」とはどういうことか。「支配のコスト」から逃れたければ支配そのものをやめれば済む話なのに、それをしないで苦しんでいる事態を指す。「自縄自縛」の指摘にたいして投げかけられる反論は、「男同士の相互監視」（多賀 2016:52）のなかで男性自身も身動きが取れないといった再度の「男の生きづらさ」の訴えである。しかし、その「相互監視」をどうするかを論じることなく、再度、議論を「男の生きづらさ」に帰着させることは、ジェンダー不平等の再生産を補完することでしかない。

多賀の問題点はこれのみにとどまらない。多賀はきわめてミスリーディングな仕方での性別役割分業をめぐる社会調査を引用しながら「男の生きづらさ」の責任の一端は女性にあると論じ、平山（2017:233, 235）から「腑に落ちない」と批判されている。

どういうことか。図2は国立社会保障・人口問題研究所が2013年に実施した『第五回全国家庭動向調査』の結果の一部を取り出したものである。回答者は有配偶女性であり、図に取り出した質問①は「夫は、会社の仕事と家庭の用事が重なっ

た時は、会社の仕事を優先すべきだ」、質問②は「夫も家事や育児を平等に分担すべきだ」である（質問③についてはのちほど言及する）。調査は、全体平均だけでなく、回答者である有配偶女性の就労形態別に賛成の割合を示している。

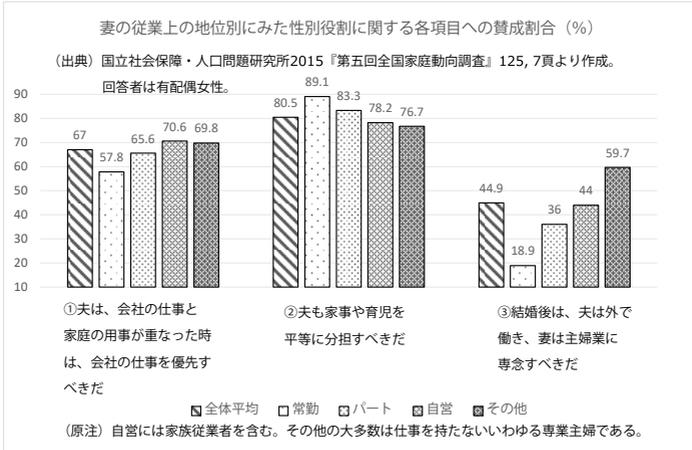


図2 『第五回全国家庭動向調査』の結果の一部

多賀は、これらのうち、図の質問①と質問②の全体平均のみを引用する。そしてこう結論する。「女性から男性に対する「仕事も家事・育児も」という期待が、少なくとも精神的に男性たちを追い詰めている側面があるのも事実であろう。(中略) とくに、妻が家事専業で、家族の扶養責任を(夫が)一人で負いながら、家事・育児も妻とより平等にと言われれば、実際の行動はともかく、その負担感は大いだろう」(多賀 2016:56)。つまり、多賀はこの統計から、「役割期待の増大」という男性の「生きづらさ」を生んでいる責任の一端が女性たちにあることを指摘している(平山 2017:233。強調引用者)。

だが、平山によれば次の二点において多賀の統計の使い方は「腑に落ちない」あるいは「不可解」である(平山 2017:235-6)。第一に、有配偶女性の多様性を無視した引用をしていることである。繰り返すが、多賀が引用しているのは質問①②の全体平均の回答のみである。しかし調査は、全体平均のほかに「常勤」、「パート」、「自営」、専業主婦の多い「その他」の4カテゴリーに回答者を分け、それぞれの回答を示している。質問①で賛成の割合が高いのは「自営」と専業主婦の多い「その他」で約7割、もっとも低いのは「常勤」で約6割だ。質問②でもっとも高いのは「常勤」で約9割、もっとも低いのは「その他」で約77%である。同調査から読み取れるのは、「同じ有配偶女性といっても、就労の有無やその形態によって(言い換えれば、女性自身にどれだけ安定した稼得能力があるかによ

って) 男女の役割に対する賛成の度合いは異なる」ということである。したがって、「家事専業の妻が、稼得能力を一手に担う夫に対して、就労する妻と同程度に家事・育児の分担を求めている現実があるかのような多賀の記述は、誤解を招く」(平山 2017:235-6)。

第二に、質問項目の恣意的な引用が疑われることである。「夫こそが稼得者であるべき」という規範意識をより直截に尋ねている質問③「結婚後は、夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきだ」を、多賀はなぜか取り上げていない。この項目に賛同する有配偶女性は全体平均でも5割に満たず、「その他」ですら約6割である。この質問がダブルバーレル質問⁴⁾であるという事情を考慮したとしても、「稼得役割はまず夫が担うべき」という規範意識が有配偶女性のあいだで共有されているようには見えない(平山 2017:236-7)。

以上の指摘をしたのち平山は、「妻たちの意識を歪めて見せてまで、男性の「生きづらさ」を訴えようとすることは、多賀がこの論考を刊行した目的、「男女ともにより生きやすい社会の構想」に向けた生産的な議論の足場づくり」(多賀 2016:199)に適うのだろうか」という疑問を投げかけている(平山 2017:237. 強調引用者)。

3-2. 渋谷知美 (2001) の指摘

ところで、2001年に筆者も、多賀(1996)と伊藤(1996)の著作を挙げ、平山とはほぼ同様の指摘をしている。渋谷(2001)は平山(2017)で取り上げられていないので、ここで論じておく。まず、先に述べた批判ポイント①「男性の「生きづらさ」を女性のそれと並列して語ることに」にかんしては、渋谷(2001)において次のように述べている。

「女性同様、男性も～する」「男性の事例からも確認された」という〔多賀(1996:59-60)の〕表現によって行われているのは、メタレベルにおける男女の対称性の強調である。ここで、われわれは、1990年代日本の男性学言説と1970年代米国のメンズリブ言説との符合を見る。Michael Messner(1998)によれば、1970年代米国のメンズリブ言説でも、「男女の対称性」が強調されていた。(中略)ここでは、男女間の権力関係が脱コンテクスト化されている(Messner 1998:262)。(中略)さらに問題なのは、「男性も抑圧されている」という言い方が、「男性のほうが抑圧されている」という極端な言説に展開しやすいということだ」(渋谷 2001:455. 強調原文)

多賀は1996年の著作で、「女性が「自分らしさ」と「女らしさ」の葛藤を経験

するように、男性も「自分らしさ」（個人的アイデンティティ）と「男らしさ」（ジェンダー・アイデンティティ）の葛藤を経験する」など、男女を対称的に語っている（多賀 1996:59-60）。そうした言説は男女の権力関係を脱コンテキスト化しており、「男性のほうが抑圧されている」という極端な言説に展開する可能性があることを Messner (1998) に依拠しながら述べた⁵⁾。

また、批判ポイント②「男性による女性支配に支払われるリスク（コスト）を「生きづらさ」と呼ぶこと」については、海外ですでに指摘されていた「コスト説」に依拠して次のように述べている。批判の対象は伊藤（1996）である。

「伊藤の「個々の男性たちということでは、男性たちもまた、この男性社会によって抑圧されているのも事実なのだ」という言葉を引用し、その「被抑圧」に伊藤が別の個所で述べているサラリーマンの自殺や過労死が数えられることは間違いがなかろう、としたうえで] 男性の人生には自殺、戦死、仕事上での過重な心労、ホームレスへの転落など、女性には比較的少ない様々な「コスト」があるという説は、アメリカ男性学でもよく見られる。そしてそのような「コスト説」は、Kenneth Clatterbaugh によれば、男であることのコストを描きだしていても、これらコストが特権や支配に無関係であることを証明していない点で、批判の対象となる。そして、多くの「コスト説」には、「権力を持つことにはコストがつかまとう。したがって、男性は権力を持っていない」というロジックのねじれが見られるという（Clatterbaugh 1996:300）。／伊藤は「だから男性は権力を持っていない」という反動的な結論は導いていない。だが、「被抑圧」と呼ばれるものが、どれだけ「特権」から自由なのか、それに対する言及をしていないのも確かである。（中略）「特権」の産物にすぎないコストの回避を訴えるだけでは十分でなく、当の「特権」の解体を、現代の産業構造にそくして論じる必要が出てくる」（渋谷 2001:453）

「個々の男性たちということでは、男性たちもまた、この男性社会によって抑圧されているのも事実なのだ」と伊藤（1996:313）はいう。その「男の被抑圧」が「男の特権」からどれだけ自由なのかが論じられるべきなのに、それを伊藤はしていない。そのことを Clatterbaugh (1996) を援用しながら述べた。

おそらく渋谷（2001）を受けてのことであろう、多賀は2006年の著書で「反省の辞」とも取れる言葉を述べている。

「いつまでも男性たちが「男らしさのコスト」からの解放を主張して結集し続けることは、ある種の危険性を伴う。なぜなら、この「男らしさのコスト」か

らの解放という主張には、男の「抜け駆け」への誘惑がつきまとうからである。ジェンダーの公正（gender justice）をめざす立場に立つならば、そうした「コスト」からの解放を求める男性の主張は、その「コスト」が経済力や権力ある地位といった「特権」を得ることの代償であることをしっかりとふまえている場合においてのみ正当性を持つ」（多賀 2006:185）

「私の研究を含む、九〇年代後半の日本の男性学は、フェミニストからの批判を受けることとなった。つまり、日本の男性学は、「男らしさのコスト」や「男性内の差異と不平等」に目を向けるあまり、女性の犠牲によって男性に「制度的特権」をもたらしている社会構造を見失っており、結果的に男女間の権力構造の温存に荷担しているという批判である（渋谷 2001 など）。／そこで私は、今世紀に入ってから、「まえがき」でも述べたように、フェミニズムや女性学が提起してきた「男性の制度的特権」という視点と、日本の男が提起してきた「男らしさのコスト」や「男性内の差異と不平等」という視点の両方を統合した、新しい「ジェンダーの視点」から、男性の生活状況をとらえ直すことをめざして研究に取り組んできた」（多賀 2006:198）

「男らしさのコスト」からの解放を求める男性の主張は、「その「コスト」が経済力や権力ある地位といった「特権」を得ることの代償であることをしっかりとふまえている場合においてのみ正当性を持つ」という言辭、批判を反映した「新しい「ジェンダーの視点」から」男性にまつわる研究に取り組んでいることを宣言する言葉が確認できる。だが、そうしておこなわれたはずの研究で「女性から男性に対する「仕事も家事・育児も」という期待が、少なくとも精神的に男性たちを追い詰めている」という主張（多賀 2016:56）がなされるというのは、一体どういうことだろう。

3.3. 渋谷の批判への男性学からの「応答」⁶⁾

渋谷（2001）論文の批判にたいする主要な男性学者による「応答」について述べておく。男性学が外部からの批判にどう対応しているかを見ることは、今後の「男性学のゆくえ」を占うのに役立つはずである。

まず伊藤は、岩波書店の「新編日本のフェミニズム」のシリーズの一つ『男性学』の総論的位置づけの文章で以下のように述べている。

「一部の女性による男性学研究にはちょっと気になるところもある。すべての方がそうだというわけではないが、「男性による男性学」に対して、「女性差別

への視線がほとんどない」とか「権力問題をみていない」といった視点が強調されることがときどきあるのだ（もちろん、そうした傾向があるケースもあるだろうと思う。ただし、こうした批判が、ぼくを名指しでなされることもしばしばあり、ひどい「誤読」ではないかと思うこともある）。正直いって、性差別に無関心とか権力関係を無視しているという批判は、ぼくについてはそれほどあてはまらないのではないかと思っている。（中略）若い世代のメンタル問題中心の視点とは異なって、政治的・社会的文脈に重きをおく形で、ぼくは男性性の課題と取り組んできたつもりだからだ」（伊藤 2009:17-8。強調引用者）

伊藤を名指しで批判する者の中には、渋谷（2001）も入るが⁷⁾、渋谷のことを指しているのだとしたら、上記は典型的な薬人形論法である。「権力問題をみていない」などという抽象的な言い方は少なくとも渋谷はしていない。したのは、3-2で示したとおり、男性の「被抑圧」なるものがどれだけ「特権」から自由なのかを論じ、「特権」の解体がいかにして可能かを現代の産業構造にそくして論じるべきなのに、伊藤はそれをしていない、という批判である。また、「政治的・社会的文脈に重きをおく」だけで如上の課題が自動的に達成されるわけではない⁸⁾。

冒頭に名前を挙げた田中は、男性学がなすべきは「男性間の差異や複数性にもかかわらず見いだせる、男性に共通した、女性に対する優越性を描き出す」こと（強調原文）、「男性の「被抑圧性」と呼ばれるものが、男性の「特権性」からどれだけ自由であるかを見極めること」である、という渋谷(2001:459)の指摘を挙げ、「女性／男性を被抑圧者／権力者として二分法的に認識するだけ」の指摘としてまとめた上で、これをしたのでは「男性と男性性をめぐる議論は実質的に出口を見失うことになる」（田中 2009:33）と批判する。

この文脈における「だけ」という副助詞には、ものごとを単純化し過小評価する意味がある。「過小評価」が差別の告発の否認に動員される戦略であることは既知の事実であるが（van Dijk 1992 = 2006:215-6）、田中がここで否認しようとしているのは「男性間の差異や複数性にもかかわらず見いだせる、男性に共通した、女性に対する優越性を描き出す」作業が持つ価値と判断できる。

しかしながら、この作業はジェンダー平等にとって重要な課題であり、平山（2017）が取り組んだのもこの課題であった。社会的存在としては「非主流（＝男性の多様なバリエーションの一つ）」の「介護する息子」を考察し、彼らもまた他のあまたの男性と同様に、女性から利益を引き出していることを平山は示した。つまり、女きょうだいに親との「関係調整」等のケア労働を負わせ、利益（ケア労働の実質的な負担軽減、親のケアを「自分独りでできている」という万能感）

を彼らは得ていたことを書き留めた。そして「息子性」（弱者が弱者のまま存在することの否定、私的なもの／内なるものへの依存）という概念にまで昇華させ、既存の男性学が主張する「自立／自律した男性像」がフィクションでしかないことを指摘した。田中（2009:107）の言説もまたそうしたフィクションを維持するものとして平山の批判の対象となっている（平山 2017:229-230）。こうした重要な課題を「二分法的に認識するだけ」と単純化できるのは、単純化する側のリテラシーが相応に単純だからであると言わねばならない。

興味深いのは、「男性間の差異や複数性にもかかわらず見いだせる、男性に共通した、女性に対する優越性を描き出す」作業を過小評価する一方で、田中は矛盾する発言もしていることだ。男性性研究として比較的早い時期に発表された中河伸俊の論文「男の鎧」（1989）を評価しながら、「ジェンダーの可変性を前提とし、男性の被抑圧性や複数性に着目しながらも、同時に男性の権力性を批判的にとらえることができる視座」が「求められる」と書いている（田中 2009:35）。

「ジェンダーの可変性を前提とし、男性の被抑圧性や複数性に着目しながらも、同時に男性の権力性を批判的にとらえる」作業（中河）も「男性間の差異や複数性にもかかわらず見いだせる、男性に共通した、女性に対する優越性を描き出す」作業（渋谷）も内容は同じである。それなのに、片方を肯定し片方を否定するのは、いったいどのような理路に基づくものなのか、たいへん興味深い⁹⁾。

中河にあって渋谷にないのは、「ジェンダーの可変性を前提と」する点であるが、これを加味したとしても結論は変わらない。田中が挙げる中河による「ジェンダーの可変性」の事例とは、「タフで男性優位主義的」なものから「フェミニズム等の影響を受けて手直しされたアッパー・ミドルクラス」に求められる男性像が代替されたというものだ（田中 2009:25）。この事例によって引き出される「ジェンダーの可変性」とは「男性間の差異や複数性」（渋谷）に置き換え可能な概念であり、中河の研究を上記のように理解する田中にとって、中河の主張と渋谷の主張のあいだに本質的な違いはないはずだ。にもかかわらず、田中は両者にたいして異なる評価を与えているのが現実であり、この現実そのものが男性学の何たるかを語っている気がしてならない。

4. なぜ男性学者は「男の生きづらさ」を訴えながら「特権を放棄すればコストもなくなる」と大々的に主張しないのか

ここまで考察してきて、否応なく浮上する問いがある。「なぜ男性学者は「男の生きづらさ」を訴えながら「特権（女性支配への志向）を放棄すればコスト（生きづらさ）もなくなる」と大々的に主張しないのか」という問いである。

これは答えの出ない問いである。即座に思いつくのは、「男性学者も含め、男性全般にとって、やはり特権は放棄するには惜しいので」、「特権の放棄などを呼びかければ、同性集団から総スカンを食らうことが目に見えているので（男性学者であっても、同性間の圧力からは自由ではない）」という推察であるが、この推察が合っているかどうかを検証する余裕は本稿にはない。

ただ一点、言えることがある。「男の生きづらさ」の主張は、差別と権力を批判的に分析するあらゆる研究分野のなかで相当に特殊な位置にあるということである。シンポジウムでの質疑応答のさい、フロアから以下のような趣旨の発言があった。黒人差別にかんする学術研究の場で権力との関連への目配りなしに「白人だって生きづらい」という主張がなされたら、相当に反動的と感受されるであろう。だが、ジェンダー研究の場でなされる「男だって生きづらい」という主張が反動として感受されない点に問題の本質があるのではないかと。

たしかに、日本における在日外国人差別について討論するアカデミックな場で「日本人だって生きづらい」とか、部落差別研究の場で「被差別部落民でない人だって生きづらい」などの主張がなされれば、糾弾の対象になるであろうことは想像に難くない。

だが、見識を備えた人びとが集うアカデミア内であっても、「男の生きづらさ」言説は反動として感受されるどころか、時に「共感」を持って受け止められる。のみならず、「男の生きづらさ」の責任の一端は女性にもあるなどという主張が看過される。

これは差別と権力を批判的に分析する研究分野のなかで相当に特殊な状況であり、この特殊性に危機感をもっている人がジェンダー研究界隈にどれだけいるかを考えると実に心もとない。このまま「男の生きづらさ」言説が男性学周辺を跋扈しつづけるのだとすれば、「男性学／男性性研究のゆくえ」は漆黒の闇より暗いと言うほかない。

5. 信用に足る男性学とは

最後に、信用に足る男性学がどのようなものであるかを示しておく。「男の生きづらさ」を言うなら「男の特権のコストであることの指摘」、「特権解体のための考察」と必ずセットでなされるべきである。また、実践面では「女性／相対的に弱い立場にある男性の邪魔をしない男性の養成」を指針とすべきである。たとえば、以下のような課題の遂行が目指される。

第一に、〈生存〉レベルにおいて女性を従属させることをやめる＝身近な女性の自立を応援することの男性への推進である。平山は、大野祥子（2016）を援用

しながら、「妻という自分の目の前にいる女性が稼得能力を備えられるよう促し、支えること」を男性に勧めることの必要性を述べている。「女性を従属させ、支配させることから「降りる」気があるのなら、まずあなたの目の前にいる女性との関係から、それを始めなさい」ということである（平山 2017:245）。

第二に、女性／相対的に弱い立場にある同性への加害（暴力、ハラスメント）を誘発する男性性の分析、および男性への加害抑制のよびかけ、加害をしない次世代の育成である。DV などの親密な相手にたいする男性の暴力（味沢・小井・中村 2002）、見知らぬ女性にたいする痴漢などの男性の性的加害（斉藤 2017）、学校や関連施設での女子や劣位におかれた男子への「いじめ」（片田孫 2014; Klein 2012; Meyer 2009; Poynting & Donaldson 2005）を「男性性の問題」として捉え、分析・記述する営みが蓄積を見ている。また、男性が男性にたいして女性への暴力をやめることを呼びかける「ホワイトリボンキャンペーン」の活動もある（同キャンペーンの共同代表には多賀や伊藤が名を連ねる。その点は評価している）。こうした研究や活動がいつそう盛んに行われることが信用に足る男性学の礎になるだろう。

第三に、稼得役割の獲得に失敗した、または獲得に固執する男性を「冷却する」言説の開発である。Erving Goffman (1952) は、詐欺を実行するメンバーとは別に、詐欺にかかったカモをなだめ、「冷却する」(cool-out) メンバーが詐欺師集団にいることに注目した。被害にあったカモは自尊心が大いに傷つけられている。その傷を放置したのでは、警察に通報されるなどして詐欺師集団が以後活動しづらくなる。そこで「冷却者 cooler」が登場する。竹内洋 (1995:71-2) はこの Goffman の「冷却」概念を応用し、見えざる信用詐欺に操られているようなメリトクラシー社会においては、競争に失敗した人をなだめる「冷却」は機能的必要物であると述べている。拒絶された人の恨みや不満をなだめておかなければ逆逆が起るかもしれない、メリトクラシー社会が立ち行かなくなるからである。

ジェンダー公正が貫かれる社会を、詐欺行為や、詐欺まがいのメリトクラシー社会と同等視するわけではない。しかし、いたずらに高まった「期待」を裏切られ、「自尊心」を傷つけられた人にいかなる対応が有効であるかを示す点で竹内の論は参考になる。ジェンダー公正を実現し、維持するためには、「男性に期待される社会的達成」を得られなかったり、得ようとして無理をしたりする男性をなだめ、「冷却する」ロジックを開発することが必要である。異性の恋人や配偶者を得られないために、あるいは稼得役割を達成できないために吹き上がる男性、期待どおりの人生を歩めなかったために女性憎悪に走る男性などを、「まあまあ、落ち着いて」となだめるのである。

「結婚したいのにできない男性」が今後増えると予想される現在、冷却作業の

必要性はより高まっている。シンポジウムのさいに、「結婚したいのにできない未婚男性が増えている現在、有配偶関係を前提にした男性学／男性性研究の分析や提案は無効である」といった内容の意見がパネリストおよびフロアから出たが、だとすればなおさら冷却作業が欠かせない。未婚でいることは人生の敗北を意味しないこと、稼得役割を遂行できないからといって人間としての価値が低減するわけではないことなどを懇々と説き、ジェンダー公正の実現が阻まれる要素をできるだけ打ち消してゆくべきである。

誰がこの作業を担うのか。男性である。吹き上がる男をなだめる作業は、酔っ払いの介抱にも似た「汚れ仕事」であると同時にケアワークでもある。男のケアを女がしたのでは既存のジェンダー構造が再生産されるばかりだ。よって、この「汚れ仕事」は男性が請け負うべきである。ただし、この種の「汚れ仕事」をやりすぎることには「抑圧のシステムや文化を変えることが疎かになる」という忠告もある (Flood 2018) ことには注意を払いたい。

フェミニストやジェンダー研究者が「男性が自身の男性性に目を向けるのはよいこと」とばかりに無条件に男性学を持ちあげて済んでいた時期はとうに過ぎた。男性学がはらむ保守性、ジェンダー不公正な性格について、もっと多くの議論が巻き起こるべきであると考えている。

(しぶや ともみ 東京経済大学)

[注]

- 1) こうした教室の風景については平山・渋谷 (2017:35) でも話題にした。中河 (1989:24) は男性の「弱さ」を強調する心理学的な理論が、「男の人ってかわいそうなんだから、たててあげなきゃ」という女性による保守的な議論を導出しがちであることを1980年代に指摘している。
- 2) この平山の文章は「多賀自身も指摘する「男性優位社会」という文脈において、この点はいくら強調しても強調しすぎることはないし、この点を議論の出発点としない男性学は、ジェンダー関係の批判的検討にはなりえないと考える」と続く。重要な指摘である。男性はすべからず稼得役割を追求すべしと考えるフェミニストやジェンダー研究者はいないだろうが、かといって男性が稼得役割を追求する事態が既存のジェンダー関係において女性に与える影響を正しく認識している者が多いとも思えない (だからこそ多賀が発するような言説が看過されるし、「男性もがんばっている」と無条件に男性学を応援するフェミニストやジェンダー研究者が出てくる)。男性の稼得役割志向が (男性の意図がどうであれ) 女性支配につながることは、もっと熱心に論じられてよい。
- 3) 平山も言及しているとおり、多賀は男性が被るさまざまなリスクが「支配のコスト」であることを知っている (多賀 2016:56)。それでいてこのコストを「生きづらさ」として語る点に問題がある (平山 2017:238)。多賀の行論を見るかぎり、「支配のコストであることを知っていますよ」という多賀の言葉はエクスキューズ以上のものとして機能していない。この点に気づいているジェンダー研究者はどのくらいいるのだろうか。
- 4) 1つの質問の中で2つの内容を尋ねる質問のこと。この質問では「夫が外で働き」「妻は主婦業に専念」の両方に賛同する人しか「賛同」と回答できない。この項目に賛成していない人が、

- 一方には賛成だが他方には反対なのか、両方に反対なのかは分からない。この質問に賛成していない人の中には「夫が外で働くことには賛成しているという人もいるかもしれないが、それを考慮してもなお「稼働役割はまず夫が担うべき」という考えを持つ人が多いとは思えないというのが本文の平山の指摘である。
- 5) 多賀は1997年の著作においても、男女を並列に論じる自身の議論が「危険性をはらん」でいることを自覚しているとアピールし、今後の研究においては「異なるパースペクティブの間を柔軟に行き来する態度が必要とな」と述べている(多賀1997:139)。問題性の自覚アピールとセットで「男の生きづらさ」を強調するレトリックは男性学の文献でしばしば見られるものである。Teun A. van Dijk (1992 = 2006:192) は「私は黒人に対して何の偏見もない。しかし……」などの人種差別を否認するレトリックに、顕在的あるいは潜在的な非難を前提とする自己防衛ストラテジーを見いだしたが、如上の男性学のレトリックでも同様のストラテジーが用いられている。現行の男性学言説と人種差別の否認言説の親和性については別稿を期す。
 - 6) 本文には否定的な「応答」のみを挙げたが、渋谷(2001)の批判を受け止めてくれた男性学者もいる。中村正(2017:148)は渋谷と同席したシンポジウムで「マスキュリニティーズという複数形を置くだけでは意味がないのではないかと。そういう批判を受けました。何か大事なものが隠蔽されていくのではないかなということも、もう随分前の論文ですけれど書かれて、それ以来私も心にとめていたことです」とコメントした。
 - 7) しかし、渋谷(2001)の名が挙げられているわけではないので、「あなたのことを言っているのではない」と言い逃れられる可能性はある。
 - 8) 「ひどい誤読ではないかと思う」「取り組んできたつもり」という伊藤のセリフに、DVやセクハラなどの不祥事を起こして「それは誤解だ」「そのつもりはない」とうろたえる男性を想起したことを付言しておく。
 - 9) 語り手の属性によって語りの評価を変えるなどということが仮にも「博士論文」を加筆修正した書籍でおこなわれるとは考えにくい、真相はどのようなのだろうか。なお、江原由美子(2019)は、田中(2015)に示された発想を「男はつらいよ型男性学」と名づけ、「そうした言説は容易に、「フェミニズム叩き」「マイノリティ叩き」という、「ジェンダー平等」とは逆の方向の言説と、呼応してしまいがち」と批判している。

【引用文献】

- 味沢道明・中村正・小井香欧里 2002『家族の暴力を乗り越える——当事者の視点による非暴力援助論』かもがわ出版
- Clatterbaugh, Kenneth 1996 Are Men Oppressed? In *Rethinking Masculinity: Philosophical Explorations in Light of Feminism, 2nd ed.*, Rowman & Littlefield Publishers, edited by Larry May, Robert Strikwerda and Patrick D. Hopkins: 289-305
- 江原由美子 2019「フェミニストの私は「男の生きづらさ」問題をどう考えるか——つらさに寄り添うのは当然、ただ…」現代ビジネス <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/66706> (2019年9月4日最終アクセス)
- Flood, Michael 2018 Is gender equality good for men? XY. Available at <https://xyonline.net/content/gender-equality-good-men> (2019年3月31日最終アクセス)
- Goffman, Erving 1952 On Cooling the Mark Out: Some Aspects of Adaptation to Failure. *Psychology*. 15: 451-463
- 平山亮 2017『介護する息子たち——男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房
- 平山亮・渋谷知美 2017「男の生きづらさ」を強調する「男性学」に欠けている視点とは——“下

- 駄”に気づき、そこから“降りる”ことができるか』『週刊金曜日』(1139):32-35
- 伊藤公雄 1996『男性学入門』作品社
- 2009「男性学・男性性研究の過去・現在・未来」天野正子ほか編『新編 日本のフェミニズム 男性学』岩波書店:1-28
- 海妻径子 2019「CSMM(男性[性]批判研究)とフェミニズム」『現代思想』47(2):92-104
- 片田孫朝日 2014『男子の権力』京都大学学術出版会
- Klein, Jessie 2013 *The Bully Society: School Shootings and the Crisis of Bullying in America's Schools*. New York University Press.
- 目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編 2012『揺らぐ男性のジェンダー意識——仕事・家族・介護』新曜社
- Messner, Michael A. 1998 The Limits of 'the Male Sex Role': An Analysis of the Men's Liberation and Men's Rights Movements' Discourse. *Gender & Society*. 12 (3) : 255-276
- Meyer, Elizabeth J. 2009 *Gender, Bullying, and Harassment: Strategies to End Sexism and Homophobia in Schools*. Teachers College Press
- 中河伸俊 1989「男の鎧——男性性の社会学」渡辺恒夫編著『男性学の挑戦——Yの悲劇?』新曜社:3-30
- 中村正 2017「コメント1(シンポジウム「男性と生殖, セクシュアリティ)」」『インクルーシブ社会研究』16:146-151
- 大野祥子 2016『「家族する」男性たち——おとなの発達とジェンダー規範からの脱却』東京大学出版会
- Poynting, Scott & Mike Donaldson, 2005 Snakes and Leaders: Hegemonic Masculinity in Ruling-Class Boys' Boarding Schools. *Men and Masculinities*. 7 (4) : 325-346
- 斉藤章佳 2017『男が痴漢になる理由』イースト・プレス
- 渋谷知美 2001「『フェミニスト男性研究』の視点と構想——日本の男性学および男性研究批判を中心に」『社会学評論』51(4):447-463
- 多賀太 1996「青年期の男性性形成に関する一考察——アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から」『教育社会学研究』58:47-64
- 2006『男らしさの社会学——揺らぐ男のライフコース』世界思想社
- 2016『男子問題の時代?——錯綜するジェンダーと教育のポリティクス』学文社
- 竹内洋 1995『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会
- 田中俊之 2009『男性学の新展開』青弓社
- 2015『男がづらいよ——絶望の時代の希望の男性学』KADOKAWA
- Van Dijk, Teun A. 1992 Discourse and denial of Racism. *Discourse & Society*. 3 (1) : 87-118. (= 2006 山下仁・野呂佳代子訳「談話に見られる人種差別の否認」『共生』の内実——批判的の社会言語学からの問いかけ』三元社:187-232)

What are the Problems of Popular Men's Studies in Japan?

SHIBUYA Tomomi
(Tokyo Keizai University)

The purposes of this paper are to examine why popular men's studies in Japan lack trustworthiness as a subset of gender studies seeking gender equality and problematizing systems of patriarchy, and to present suggestions that will render popular men's studies more worthy of trust. First, we point out problems in popular Japanese men's studies: 1) popular Japanese men's studies put "difficulties in men's lives" (*Otoko-No-Ikizurasa*) and "difficulties in women's lives" in parallel, ignoring the asymmetric positions of men and women in a society where distinct gender discrimination remains. 2) Popular Japanese men's studies frequently identify the cost of dominating women in families as "difficulties in men's lives". We conclude that "difficulties in men's lives" are nothing but setbacks of domination and that men trap themselves in a gender role characterized by the need to dominate. Second, we assert that accentuating the "difficulties in men's lives" with little recognition of gender politics is a considerably odd behavior in a sphere of study seeking to criticize discrimination and power. As an alternative, we present the concept of trustworthy men's studies. Trustworthy men's studies should work on the following agenda items: 1) Recommend that men support their wives or partners to the point of mutual financial independence; 2) Analyze men who attack women and/or socially subordinated men; 3) Develop discourses for calming men who feel threatened while continuing to pursue the gender role of "breadwinner."

Keywords: Gender politics, Masculinity studies, Men's studies